

在宅医療 広げたい

尼崎市医師会が塾

自宅で療養する人のために24時間体制で往診や訪問看護を行う「在宅療養支援診療所」を増やそうと、尼崎市医師会などが「あまがさき在宅医療介護塾」を始めた。「負担が重い」と敬遠される中、実情を伝え、担い手を増やそうと努めている。
(協孝之)



実情伝え 診療所増図る

県によると、2015年4月現在、阪神地域では計1743か所ある一般診療所のうち在宅療養支援診療所は295か所(17%)。尼崎市医師会によると現在、同市では426か所のうち99か所(23%)となっており「24時間対応による負担の大きさが理由で、思うように増えない」という。

こうした現状を少しでも変えようと先月、初めて同塾が開かれた。集まったのは尼崎市内の開業医、訪問看護師、薬剤師ら約90人。最初に、1995年から在宅医療に取り組んでいる長尾和宏・長尾クリニック院長が「さあー始めてみよう、在宅医療」と題して講演した。

その中で、日本では元々、自宅で看取る件数が多かったが、76年に病院で看取る件数が逆転したことなどを紹介。「在宅療養支援診療所は24時間対応が求められるが、ほとんどは電話対応で済む。看取りには多くの

開業医が在宅医療をするために必要な情報が紹介されたパネルディスカッション(尼崎市で)

在宅療養支援診療所 自宅で安心して療養生活を送れるように、国が2006年に導入した。24時間、医師や看護師が他の医療機関と連携するなどして訪問できる体制を確保することが条件。14年度で全国に1万4188か所の登録がある。

場合、訪問看護師が立ち会ってくれる」と体験を語った。

続いて、市内の開業医や薬剤師、訪問看護師ら7人がパネルディスカッション。訪問看護師が「私たちは薬の管理や採血、点滴など、大きな病院と同じことをしている」と仕事内容を説明すると、在宅医療に取り組む開業医は「ケアマネジャーや訪問看護師が患者のそばにいてくれる。医師はチームの一つの駒という意識が必要」と心構えを述べた。

今後、在宅医療を始めようと参加した医師は「薬剤師ら多くのスタッフにサポートしてもらえることが分かった。実態を知ることができた」と話していた。

市医師会などではこれからも同塾を続けることにしており「在宅療養支援診療所が増えるように頑張りたい」としている。